

「イグアナ」

—二稿—

2025/11/03

〈人物表〉

辻田 和樹 つじた かずき (29)

保険会社に勤める営業マン

藤木 美桜 ふじき みお (26)

和樹の会社の後輩で、不倫相手

辻田 瑛子 つじた えいこ (30)

和樹の妻・実業家

辻田 幹雄 つじた みきお (72)

瑛子の父

平塚 義道 ひらつか よしみち (60)

辻田の客

1. ラブホテルの一室（昼）

辻田和樹（29）、スーツ姿でベッドに腰掛けながら、スマホを弄っている。

和樹 「そうだ。もうラインで送らないで。言ったよね？」

藤木美桜（26）、ブラウスのボタンを閉めながら、

美桜 「あー、ごめん」

和樹 「寝てる間とか見られるかもだし。このアプリだと履歴とか全部勝手に消してくれるから」

美桜 「……うん」

と、スカートを履きながら、気のない返事。

和樹、イラついて、

和樹 「聞いてんの？」

美桜、和樹の方を向いて、真剣な顔で、

美桜 「一応、わざとやってあげてただけだ」

和樹 「……は？」

美桜 「バレた方が和樹が助かるかなって」

和樹 「何言ってるの」

美桜 「だって離婚したいんですよ」

和樹 「そういうことじゃないから」

美桜 「でもできないんですよ」

和樹、鞆を持って立ち上がり、美桜を睨む。

美桜 「絶対私の方がいいと思うけどな」

と、顔を近づける。

和樹、美桜の頭に軽くデコピンして、笑う。

和樹 「早く服着て。外回り戻るよ」

美桜、恨めしそうな目でジャケットを羽織る。

2. 和樹のマンション・外観（夜）

湾岸部に位置するタワーマンションの高層階。

3. 和樹のマンション・リビング（夜）

夕食を囲む和樹と、向かいの妻・辻田瑛子（30）。

リビングの棚には、二人のウェディングフォトが数枚。タキシードとドレス姿で笑顔でハグしたりして

いる二人の姿。

その横には段ボール箱大のガラスのケージ。中では一匹のイグアナがじっと固まって息をしている。

互いの皿にはナイフとフォークで食べるタイプの肉。

和樹、瑛子のグラスが残り僅かなのを見て、

和樹 「あ、飲む？」

と、甲斐甲斐しくボトルを手に取る。

瑛子、虫の居所が悪いのか、ぶっきらぼうに、

瑛子 「いない」

和樹、ボトルを戻して、

和樹 「……だよね」

和樹、瑛子の機嫌を取ろうと、貼り付けたような笑顔で話し始める。

和樹 「それでさ、その契約してくれたお客さんが、保険ってベツトにも掛けられますかって言うのよ」

淡々と食べ進めている瑛子、和樹には一瞥もくれず、肉を一切れ口に運ぶ。

和樹 「だからさ、はいワンちゃん猫ちゃんのペット保険もございますつつたら、こんなでかいイグアナだって言うの」

と、ぎこちなく笑いかける。

瑛子 「……固い」

和樹 「え？」

瑛子 「いない」

と、口の中の塊を紙ナプキンで取り出し、ため息。

和樹 「ごめん。ちゃんと低音調理してから焼いたんだけど、なんでだろ。（自分のを食べてみて）ほんとだ」

瑛子 「いりどりも良くないかな」

付け合わせの人参はところどころ焦げている。

和樹 「……ごめん。じゃあ終わりにしよっか。どうする。お風呂もう沸いてるけど。あ、でもまだお腹空いてるか」

と、食器を片付け始める。

瑛子 「あのさ」

と、箸を置いて和樹を見る。

瑛子 「ずっと言おうと思ってたんだけど」

和樹、固まる。

瑛子、意を決して、

瑛子 「私、もう長くないんだって」

和樹 「え？」

シャクシャクという音。イグアナが草をはんでいる。

4. 美桜の家・寝室（昼）

美桜、ベッドに寝転がってスマホをいじっている。

メッセージアプリには美桜の送った「おい」「暇」「返事しろ」などの文面。既読はついていない。

数秒経って、メッセージが自動で削除されていく。

美桜、スマホを閉じて、枕元に投げ捨てる。

5. 大学病院・待合室（昼）

瑛子と和樹、ベンチで順番を待っている。

瑛子、仕事の電話をしている。

瑛子 「ごめん、十一時のミーティングはリスケでお願い。分かってる。先方には社長の私から改めて謝罪しておくから」

瑛子、電話を切るが、気が立っている。

和樹、瑛子の手を握る。

瑛子 「何？」

和樹 「セカンドオピニオンでひっくり返るなんて、よくあるよ」

瑛子 「別にいいからそういうの」と、手を振りほどく。

和樹 「……そういう気分じゃないか」

看護師、診察室から廊下に出てきて、

看護師 「辻田さん、辻田瑛子さん」

6. 大学病院・診察室（昼）

瑛子と和樹、診察室のモニターを前に座っている。

医師 「……辻田さん、どんな時でも希望は残っていますよ。念のため、CTだけウチでも撮ってみましょう」

瑛子、伏目がちに頷く。

看護師 「検査こちらです」

と、瑛子に促す。

和樹、瑛子に声をかけようとするが、言葉が見つからない。

和樹に気づかず瑛子、看護師の案内で診察室を出る。

和樹、医師に礼をして、瑛子に続いて部屋を出るかと思いきや、踵を返し、

和樹 「あの、お伺いしても」

医師 「はい？」

和樹 「その、確かなんですか？ 半年というのは」

医師 「……ええ。推定にはなりますが」

和樹 「……具体的に何日後かってのは、分かりますか？」

7. 大学病院・入り口（昼）

入り口のロータリーに走り込んでくる高級外車。

停車。運転手、降りて後部座席のドアを開ける。

辻田幹雄（72）、出てくる。

瑛子と和樹、ちょうど病院から出てきて、

瑛子 「お父さん」

と、幹雄を見て驚く。焦って和樹を叩き、

瑛子 「言わないでって言ったよね？」

和樹、ボソッと呟いて、

和樹 「……言う訳ねえじゃん」

幹雄、二人に駆け寄る。

瑛子 「なんで」

幹雄 「知り合いに聞いたんだ」

瑛子 「ごめん、隠してたわけじゃなくて」

幹雄 「馬鹿野郎」

と、和樹の胸ぐらを掴んで、怒鳴りつける。

幹雄 「どうしてこんなことになんだよ」

和樹 「……すいません」

幹雄 「お前な、自覚が足りねえんだよ。女一人守れねえでどうすんだよ。馬鹿か」

和樹 「……はい」

幹雄 「馬鹿か」

と、和樹に容赦なく蹴りを入れ、胸ぐらを掴んで、

幹雄 「瑛子はお前より働いて、お前より稼いでんだから、お前が瑛子の世話しねえと、瑛子がダメになったら、お前の責任だろうが。誰のおかげで生活できてんだよお前は。なんのために結婚させてやったんだよ」

瑛子、和樹から目を逸らして立ち尽くしている。

幹雄 「愛情かけてやってんのかよ。掃除も洗濯も、食事も、全部言った通りやってんのかよ。瑛子のためにお前が全部やんだよ。足りねえからこうなってんだろ。馬鹿野郎」

病院に集った人々の視線が集まっている。

瑛子 「お父さん、やめて。みんな見てる」

幹雄、手を離す。

和樹、膝から崩れ落ちる。

幹雄 「瑛子、乗りなさい」

瑛子 「え？」

幹雄 「こんな男と暮らしてるから体が悪くなるんだ。すぐ治る。一度帰ってきなさい」

瑛子 「……はい」

瑛子、後部座席に乗って、和樹を見下ろす。

車、走り出す。

雲一つない青空。

和樹、深呼吸。車の走り去る音。

和樹、ゆっくり両手を広げ、もう一度深呼吸。

空を見上げて、和やかに笑う。

和樹の笑いが、高らかな声へと変わっていく。

8. 平塚の自宅・外観（昼）

邸宅を囲う石造りの外壁。3メートル以上あるうかという高さ。

9. 平塚の自宅・リビング（昼）

広大なリビング。

その一角には、自動販売機くらいの大きさの透明なケージ。中で1・5メートル級の巨大なグリーンイ

グアナが木によじ登っている。

スーツ姿の美桜と和樹、ケージの前で草をはんでいるグアナを見ている。

美桜 「可愛いですね」

平塚義道（60）、二人の後ろに立っていて、

平塚 「こいつは俺がいなきゃ生きていけねえ。餌も俺からしかもらわねえ。けど不思議でさ、俺は今こいつのために生きてんだ。生かしてると思ったら、生かされてんのよ」

美桜 「素晴らしいです」

平塚 「どうだ。お宅のより立派か？」

和樹、イグアナをじっと見つめている。

和樹 「……ええ」

10. 幹雄の自宅・リビング（昼）

広大なリビングの一角には、巨大な水槽。

幹雄、中で泳ぐ無数の金魚に餌を与えている。

勢いよく喰らいつく金魚たち。

瑛子、ソファに座って、俯いている。

幹雄、金魚の様子を見て、笑う。

11. 平塚の自宅・リビング（昼）

和樹と美桜、テーブルに書類を広げている。

美桜 「保険をお掛けになりたいというのわかります」

平塚 「金が惜しいんじゃない。愛情をかけてやりたいんだ」

美桜 「ええ」

イグアナ、木の葉をはんでいる。

和樹、書類の説明に戻って、

和樹 「この特約は、ご病気が発覚する前のご契約でしたら、何も心配ございませんという意味です。万が一、後に何か分かってても、それは不慮の事故と同じ扱いです」

平塚 「ああ、じゃあ人間の保険と一緒にだ」

和樹 「左様でございます」

12. レストラン・外観（夜）

ホテルの高層階に位置するレストラン。

13. レストランの一室（夜）

和樹と美桜、グラスをカンッと鳴らして乾杯して、

和樹 「誕生日おめでとう」

美桜 「また誤魔化されるかと思ってた」

和樹 「な訳ないだろ？」

階下からは東京の街が一望できる。

美桜 「今度、和樹と旅行行きたい」

和樹 「んー？」

と、グラスを口に運ぶ。

美桜 「また誤魔化す」

和樹 「誤魔化してないよ」

美桜 「じゃあ、海外行こ。ヴェネツィア」

和樹 「……いいよ」

美桜、驚いて、

美桜 「本当？」

和樹 「うん。でも、半年後ね」

と、笑う。

美桜、呆れた顔でグツとグラスを飲み干す。

（終わり）